藤屋 侃士
(下松市幸ケ丘)

同じ根を持つ二つの絵本
～機関車トーマスと走る（下）～

間もなく二歳になる孫が「機関車トーマス」が好きだと知って、我が家で話題になった絵本。残念ながら私には幼いころ絵本を読んでもらった記憶が全くない。結婚して三人の子供への絵本の読み聞かせは妻の役目、そのせいか親子の絆（きずな）は妻の方が強い。

三年前の二〇一四年にイギリス中部の湖水地方を一人旅した時、古い蒸気機関車に連結された昔の汽車に乗ったが、「機関車トーマス」の絵本のことは全く考えなかった。

ただ、イギリスを代表する絵本作家、ビアトリクス・ポターが書いた「ピーターラビット」のふるさとを訪れるのは旅の目的の一つであった。ポターが愛した湖水地方を観たいと思っていたからである。それは次女と関係がある。

三人の子供は妻の絵本の読み聞かせで成長したが、三人とも好みの絵本が違っている。絵本に一番関心を示したのは長女で、年子の次女は読み聞かせの最後の部分のころはスヤスヤ眠ることが多かったらしい。それでもお気に入りの「ピーターラビット」の時は最後まで目を輝かせて聞いていたという。

ピーターラビット・シリーズ二十三冊のうち、

自然の中の小動物が生き生きと描かれている

の第一作が出版されたのは一九四五年である。イギリスを代表する二人の絵本作家の間には約四十年の差がある。

今の評価は四十年先輩のポターの方が高いようだが、それは絵本作家としてだけでなく「ナショナル・トラスト」と関係があるらしい。これは英国の歴史的建造物や景勝地を国民の遺産として保護、保存するボランティア運動で、ポターはこの運動に大きく貢献した。

イギリス中部の湖水地方の美観をこよなく愛したポターはその保存運動に尽くし、遺産の多くもその運動に寄付している。

ピーターラビットに登場するうさぎ、あひる、のねずみ、猫などはこの湖水地方の自然の中で生育し、ポターはその姿を生き生きと絵本に書いている。

一方、オードリーも英国鉄道遺産の保存活動に大きく貢献している。

二人は絵本作家としてだけでなく、イギリスの伝統文化や美しい自然環境を絵本を通して伝承しているのだ。

今、絵本という文化が軽んじられる傾向にないだろうか。静止画面の絵本より動画のアニメTV番組の方に幼児は関心を持つ。しかしTVに子守りをさせてはならない。

スキンシップを伴う絵本の読み聞かせの方が、親子の絆に大切なものだと思うのは私だけだろうか。

今も我が家には半分以上が残っており、大人になって買い集めたピーターラビットのイヤープレートも十皿ある。新婚旅行でイギリスに行ったのも、ピーターラビットのふるさとだからとご主人を説得したというから、幼いころの絵本の影響の強さがわかる。

長女は四十年以上過ぎた今も、どの絵本のこともよく覚えているのに驚く。長男が結婚して独立した際、妻が何度も読んだ「どろんこハリー」の絵本を新しい家に持って行ったのも驚く。幼いころの絵本の読み聞かせの大切さを痛感する。

さて、ピーターラビットの生みの親、ビアトリクス・ポターは一八六六年生まれ。第一作「ピーターラビットのおはなし」が出版されたのは一九〇二年のことだ。

一方、機関車トーマスを書いたウィルバート・オードリーが生まれたのは一九一一年。シリーズの第一作が出版されたのは一九四五年である。イギリスを代表する二人の絵本作家の間には約四十年の差がある。

今の評価は四十年先